法栄寺歳時記

２０２６年
１０月１日
第１５７号
発行
法栄寺門徒会

法栄寺定例法話会

九月九日（水）午後一時より定例の法話会がありました。この日の講師は、初めてのご縁を頂く、白老町の真雄寺住職　本澤　盛顕師でした。

三帰依文唱和に続き、資料を配付され、初めてのご縁ということで、自己紹介をされました。出身は、山形の四百年位の歴史を持つ古刹の出で、大学卒業後、札幌のお寺で役僧を勤め、四年前に真雄寺の住職になったという事です。

本日のテーマは、薩摩かくれ念仏ということで、資料を駆使され説かれました。

鹿児島では、一五九七（慶長二）年から約三百年（明治九年九月五日まで）浄土真宗の信仰が禁じられたそうです。



当地は、浄土真宗が多い土地柄で、当時の藩主が、政治的・経済的懸念から踏み切ったようです。厳しい弾圧を受けながら、信仰を止めなかったという事です。



「かくれ念仏」と聞くと、厳しい弾圧や差別、その悲劇的な面ばかりに目が向いてしまう。しかし、本当はそんな中でも本願念仏の道に立ち続けた人々の歴史であり、現在の私達に何を問いかけるか、何故念仏を止めなかったか、そこに着目することが大事ではと説かれました。

信仰の源泉は何か。大無量寿経の三誓偈。これは、四八願の後に出てくるもので要約みたいなものという事です。「名（南無阿弥陀仏）が称えられることによって、貧愚が、世を超えるという救いを誓う」というものです。

ここで、貧愚とは、我執に囚われている者ということで、仏様から見た我々のことだそうです。

また、無三悪趣の願がある。三悪趣とは、地獄・餓鬼・畜生のことで、仏様から見た我々の姿だそうです。地獄とは、誰ともつながりを感じられない世界。餓鬼とは、欲・執着の心。畜生とは、人に隷属していくありさま。と説かれました。

秋彼岸会法要

九月二十日（日）午後一時より彼岸の法要が厳修されました。

真宗寺の住職、当寺の住職・役僧の三人による読経の中焼香がありました。

その後、法話が二席ありました。この日の講師は、四年前にもご縁を頂いた、札幌市の観照寺住職　宇都宮　力　師でした。

彼岸の過ごし方・仏様を通して教えてもらったことを話すと始められました。

ご自身で葬儀と一周忌を勤められた祖父について語られました。



元気な時は、たいそう体格も良く、体力気力に満ち溢れたトラック運転手だったそうです。或る時から、寝たきりになり、祖母様と御母堂の手厚い看護を受け、亡くなっていかれたそうです。



真言宗の僧侶のネット記事を紹介されました。

「この日本において、一番信者数の多い宗教とは何か。」

ここでいう「宗教」とは、宗教団体のことではない。宗とは要のことであり、一番大事なこと、これさえあれば生きていけるというもの。或る人は、お金・強さ等色々あるだろう。この点で、無宗教の人はいない。つまり、「日本人が一番大事に思っている事は何か」と問われている。それは、「他人に迷惑をかけない教」ということです。

祖父は、他人に迷惑をかけなければ生きていけない体になった。祖父だけでない、我々は必ず死んでいかなければならない、だから仏教が開かれたと説かれました。

映画「プラン７５」を紹介され、生きる上で本当に大切なことは、迷惑かけずに生きることなのか。善悪・損得・都合の善し悪し以上に大事なものを見つけられるかと説かれました。

「迷惑」について、普通、他人に不利益・不都合を被ることと解釈するが、元々の意味は、まよう・まどうということと、親鸞聖人の教行信証の一節を紹介されました。

親鸞聖人は、なるべく他人に迷惑をかけない事を自力と呼んだ。それに対し、他力とは、仏様の力のみを指す言葉と説かれました。

自力には弊害がある。馬鹿にする・見下す・子供扱いする・比べると説かれました。親鸞聖人は、浄土こそ本当の拠り所と説かれたという事です。詳細は紙面の都合で割愛。

法栄寺門徒会奉仕活動

【清掃奉仕】

九月十九日（土）午前九時よりお彼岸に向けて清掃しました。



